武江年表

三

リイチ5
760
3

門 伊5
號 760
卷 3

武江年表卷之三

延宝元年 癸巳

九月廿一日改元

牛込弘福寺宴剣 宴山該牛 禅師なり 翌年本堂造営成○浅草三筋
蓮華寺○九月十七日嫁菊九代将軍 七十才
○十月廿二日連華師里村玄祥率○十一月廿三金地院五山十刹諸
山惠林寺命ずる○十一月廿三塔上寺大樹成 谷師常味 とまとを掛るとぞ
○十一月廿日庁桐石舟斎率 六十九才号宗関石舟流祖の元祖
○勅二帝芝居を大名顕 宸天皇 推参 を上る 続狂言を興行 元祖慶長十年 十七才なりて
初新吉原を造り始て荒木を植る

同 二 年 甲寅

二月濱茶大四ヶ十五重再建○二月廿六日夜怪火あり
本こう函(概引)空平橋を渡る
○八月西久保八幡の神輿切妻〳〵引茶屋町を持く
成る○了翁得新白金殿堂ヶ原を建荒典生涯一万部老
を収む○五くに法ヶ○松尾忠左ヶ今年蕉翁して風雅坊
深川ヶ庵を結ひて住ス芭蕉一株を載世人芭蕉庵といふ
○十月七日將軍探幽法印卒七十三才三田大安寺ヶ墓碑あり
按ずるの内建亜一西くとい
○同廿日三ヶ茶海堂卒公四十六歳出家なり
第自性院ヶ葬
延宝二年　巳酉
○二月廿日
基天下洪澄金廉を発して織氏を振給しめ
○二月六日古茶ヶ伝卒○二月廿六日金杉村橋北八幡

○閏二月十四日古茶ヶ雪卒六十四才三ヶ庵と号
茶ヶ子ヶ名あり
○九月本横町山村長左衛門廿六日我猿狂名を奥行也
武州の名歌徳岡蓑ヶ我といふ拙る小平蕉翁の弟子也延宝二年未裏宝町辺の浪
蕉の奥ヶ狂名ヶ〳〵を得さまし〳〵ヶ宗匠ヶ支村山又左ヶ小野雲のおくふかい
男女交りて名家狂名を使しけるものをいふ
さまこの辛苦故ヶ我狂名をかくるなし
同巳年　丙辰
七月廿日ヶ日風雨ヶ大洪ヶ○九月鉄砲洲築地ヶ宝竹ヶ支動を
能奥行一年ヶ春ともいふ
押谷ヶ卒名ヶ芭号蕉翁ヶ初霊事を薄くるの始ヶ云
○九月廿二日夜ヶ新堀ヶ支宝ヶ火
墨ヶ名ヶ安亜の所焼火盛ヶ〳〵一人身を脱して烟中ヶ入炎焔を
搔く庭ヶ稲ヶ生ヶ者ヶ有るりの或ハ焼とし或ハ焼ヶ不見ヶ者ヶ
ヶ又九月晦ヶ炎焔の中を馬ヶ捨ひ獲ヶ〳〵ヶ

接てりくの如しとぞ云く（以上浄土濃国篇の文を畧せり）○十一月七日暮六半時吉原江戸町二丁目より炎火して西北風烈しく廓焼亡に及び廓内焼尽て本新中のぐふいりて焼る（此時娼女十二人焼死に及ぶ兵殺の後始て焼る三浦屋の脇屋二階宅ゆゑ高楼す）

○十二月廿六日江府火災あるゝ和泉屋金蔵あり（未詳）

延宝八年　丁巳　十二月改

正月八日下谷池の端横田七郎右衛門あやまつ事を憂ひ免て雑司谷鬼子母神を祈せしに其間男木村伊右衛門小田町三丁目川辺今日鬼子母神像を感得し後七郎右衛門の妻男子をうむ翌年此像を本所本佛寺安置す○七月中旬より江戸中町々踊をすゝめ（案の一本に延宝己巳の年なせ踊りもあり老ゆ踊るとゝいへり）

○八月六日大風雨本橋町辺を不ク云潮よる

○江戸雀校訂七巻　○本朝諸国元考一冊刊行　蜜加爲編

同六年　戊午

阿頂上人奥澤村浄真寺九品佛墓碑○東海道濃飛路五冊刊行（他者未詳）○平蔵地蔵院元江戸市村行き巡伝羅漢の巡礼する人容貌も奥羽なりしとあり○垂帯を惜り菩提の門に入り今年廿九才伝教寺鄙憲潔如上人て西行法師とあり拾伝をもとゝ

此ゝ雑納の日別髪して雑巾髪とり後を脊おひ法衣掛けふ

ある後ふ本所五ツ目自性院を再興し常行念佛を修まて世ゝ作の恩寺といふ（享保三年ふ寂せり）○十月六日牧野右京亮修理亮（二千七百）

○同月八日右筆二代目栄率（七十二才）

同七年　己未

夏大雨大川筋溢れ出る

○十一月、二日浪人平井権八品川に於て刑せらる 法人の類る西表寺いたて但し平兵衛

の狂気不幸隅田流の長刀を元祖て洗りしとて同し時代と

云ふ人あり世に高名なる人にして権八よりふるし

○十二月十二日連寺師匠村昌通卒 六十九才

延宝八年 庚申 八月改

正月八日浅草春朝卒 北斎坊移次と号し大画の妙を極めて浮世絵を作り

辛酉雑考江戸名所 図会年表 ○三月十日朝五半時より巳半時迄近隣夜の如し ○京周清堂

某師匠江戸に来り寄宿 ○二月築地西本願寺今年四

て二月中半建立あり中或説に元禄元年の江戸名所記に元禄六年時迄て建立すあり

両説共に今浅草大坂町を元町と唱ふるは昔西本願寺横山町二丁目の東側に

あり此橋の元を商ひし家多くあり西国に多く唱へしとなん

○江戸初日輪寺記の如くのごとし ○五月林基称春勝卒 六十三才

○六月廿九日俳人松江維舟卒 七十四才 俳諧大系年譜 ○八月廿八日芝如来堂

五智如来の大佛入仏供養あり 再建あり ○八月六日大風雨深川本所

浜町霊巌寺海嘯八丁堀海上漲り上て家を損し人溺る数出

橋梁一時に止る谷中法華寺門前に本堂深川まで傾くの類倒壊再建

本所三笠町に浩波あり三て民家を溺し

○十一月晦日酉の刻より坤の方に廣サ二尺許長廿間ばかりの人魂

自寺あり此時の星を長空に星とのみ十二月に至り消

○技藝拾葉集成 二十三巻

延享元年 甲子

永代橋八幡宮八江戸を離れて永代の橋も掛りしかば延宝

のころ社とりて永二三町のうち酒肴菓亭を設け服装の女を

四ツ谷勝の茶屋〻に居〻りるとあり此地高井戸へ樂遊する清
ふ〻この遠くに房総の群山迫くに今城芝浦を眺望し往来の所
みてあり〻とて牡丹処室の江戸図ふよりて清〻むへ　此江戸図小代
あり今の所と見へ　○　あるる紀二冊刊行　惟次庶深ゞ図我の
ものと見える素紙あり
○南畝先生の仮名世説ふ処室二年の編玉町の沙汰と云素紙を引
て以ふ遠彫饅頭笹雪金粉山の名代せ〻茶饅頭茶水の下
おこ〻茶白山の麦右衛つらべ〻だう燒　ふの燒ふ〻そなをうけてころ〻　処室元年
を見せりのとすを　八月江堀町まそべバウと名つけ〻茶入
色黒きふことこと　八丁堀の松屋せんべの日本橋通り書る沙屋ちりめん
まんぢう羅町の助こふのやきまめ　処橋のちゑらく芸の二宮陽大弘
大阪堂の源ふ茶を素藤　云く南畝先生云処室の江戸の沙汰
ふ〻物ふつ牛屋せりと云く　晩の本偶今ふ移りて商家の軒の上牛あり

○作新宮と号〻小さきある蝋燭を作りもて　民茶山岩作新宮の作物茶
ちらちらやを　○此江戸俳諧ふ江戸沙汰林風と云ふ口調ハ田代松意四友等
とり新りて盛ふ行き又茶句対とりのふ新りて行き元禄八年の
ころ又行きとり○堀町ふ近江の巫女ありて　ものとめ　ものる大女　天二寸
又甫喜と云ふ男を見せ物とす　用達茶ふ
○江戸絵図い処室の図多けて要〻と見西本願寺を加へるハ
實文処室の写とり始り〻あるべ〻　処室八年様行せる西の内拾大年縁巻の
紙屋市兵衛屋板とあり元江戸分るの図ハ麦江戸茶二巻あり麦茶橋通り瓦町表
ろ屋見ふ次りを左右とと仮名もて麦〻あり見玉寿昌ら補益ら
寛文の江戸より室永のころと左右ら撰のりの　江戸図二巻あり麦茶橋通り瓦町表
一分十万一分十八万一分七十万のあるよ〻ほ　麦茶橋通り瓦町表
処室の江戸図ふ今と移りて〻るをいさゝか違ふ
佐久間町　弘化田安ふ　村松町　節遠月又　村石町二丁目
宅家下ふ生　宅家二月ふ生

今の通り新石町之 二本榎 旧名追分にもあり 嵐完 神田の臺下 新小田原町 三河町の佐柄木あり こんにやく町 神田
おなじ丁の内 ちんきの河岸 一つ橋より神田橋の辺 おせ橋 今のさへぐさ新しし橋 戸越橋 岸丁より八丁堀へ渡る今弾正橋 壽
二つ石橋 今云ふ三橋之天和元年の写ありへちら橋とあり 久右衛門町 向柳原今の世 浜松町四丁目古名 法恩寺 上野清水門前入口に
清水稲荷社あり おたまヶ丁の跡 日本橋の北まで泥せり 東叡山入口に大手天神黒門左に池に
源に本郷坊あり 池の端通信地あし 神田やぐら上の門前西側に左
ゑちすき町 浅草田原丁並側 今の神田猿楽町合澤町の一円に加州屋敷
郎あり まさご丁は成佐今の湯浜横町の所にありしが後は此地一旦明地と成すここ丁六 今の辺へ引るかなる屋敷中に記は本ぼへ引まで元跡近辺なかき数戸あり しり後まこ町屋となりて今の沢町といふ加賀屋敷 庄平記ありし所由へ走るときるべし
今の英町の所本多隠岐守屋敷あり 今の昌平橋を仮橋とあるに
廣小路郎あり 安国橋際今の同朋町瀬戸地の所柳本滋とあり 今の堀田原の所堀田對
新古柳橋並に安国橋本菜亀の方にならべて矢の倉さけ処

清船は本所にも船かけ通りより東のうゝ横堀にあり 今の菜ヶ橋
ちゝ元書所の橋とあり安国橋南の方川中に居船と記して一艘の大
船を画り 考未 四向院山門あり 吉原にけんどん町あり 吉原南の並り之武家一本にけんどん屋岸
咲あるべし 東宝搭の抹 八丁堀る流引て武家屋敷の之 本所深川の鉄砲洲十軒町のみにあり
小網町 江戸町 志水町 前上町 やはも西本 寺の東あり 羽黒殿橋 今の浅蔵橋あり 白金
瑞聖寺境内に蓮葉の形したる池あり是より前の湧水の事を画
あり甘之井町先え流る于に錢座あり 赤坂氷川社 根津権現社ともに
同地にあり 音羽町 色田園なり 亀戸天満宮向銭座之 深川
弥兵衛丁 岩右衛門町 新兵衛丁 治右衛門丁等あり 越中
島は松平越中屋敷あり 永代寺八幡宮海にさしむかへあり
昊嶽る場は海に入流をなて永代寺に對せり

天和元年　辛酉　九月廿五日改元

二月京田屋火事焼失　上野忍八幡別当護摩堂の住持法下　亮賢寂基　九月院家と成る

○浅草門虎ヶ○浅草観音○山王神田の祭礼隔年あり今年

[illegible]年毎年あり

○日蓮上人二百年忌　法花宗　院法会

○十一月廿八日九山お拵ち

ちりぬ火事にて多く焼亡　○十二月廿八日川田の座ちり出火して四ツ谷

赤坂麻布三田芝牛町不残焼る○今年表国橋に掛船あり矢の

倉南服ちり年前一ツ目の橋陸へ渡る仮橋を設く今年を元禄元

と称す十五年の改元孫九年ぶりの西へ経営あり

同　二年　壬戌

二月六日市谷小あり〜護寺山天龍寺新火ぶ遊廓年に若く

焼きる○二月廿八日俳人角山宗因江戸に年に　七十八才

○三月俳人石田未孤年　未孤の男あり○二月琉球人来聘　四度名護屋に

○二月十七日明の茅窟和尚生没年　年八十二　常盈久茲那瑞竜山下

年暮に○二月廿九日将軍霊廟年　二十才　輝照女

○七月湯島下順庵　名儒ちる　信孫　年に元

○七月二日大雲寺門前西蓮○同二日落合茶屋ちる寺山白髪茶

禅師寂に○七月浅草人浄瑠璃語の新天下一の号を信ちる

○同月彦根船の寸法定あり○八月朝鮮人来聘　四度尹趾寛副使李

彦綱従事朴安期

年ぶりを

旅館とし○九月安宅丸御船を解ひ〜をめ

○九月竹腰摂津守敏山内小地をのそり学寮を建て恐中

浅ちり義経を祭〜経堂を建る○青山横丁に長弾ち小古洞

仏所法隆像を安置に　寛永十二年　と勝ちり　昔東本願寺の内小あり〜を大坂

城中へ移さるゝ○浅草橋の後江戸へ持来り今村氏より八丁堀の屋敷
敷をあらしを寄寺宿命和尚不約して今年九月遠行ありしとて
○十月晦日戸田茂睡の男保寿軍を墓所浅草金龍寺に葬る
此所を多向和と云浮世の法義聴
り退悼の弔人の多なりしのせし○十二月廿八日東下刻弱迄大円寺より出火
本所上野下谷池のそこ筋遠山門邸田の色日光橋まで浅草法蔵
同法つる浴町辺矣の法会女国橋焼落本所深川不動尊
八ツ〻法火まで此火多不遇て財宝を多くるりの命へ焼死怪家人不殺〻く天狗の毒死
亟まで書籍の科一ツ二百文の服を多貧人に施せり○この時池のそこ仲丁勧学屋の市店土蔵
不火入て女年求亟けり内外の書籍一万に余服巻灰焼とあり〻〻くの浅川の芭蕉
庵焼ずまれ翁も湖水ひとり
畑中をの色〻〻とのこれ残のこるべし　世火この後本所士民の家を拆せ〻る
元の田圃と成る○湯島不町屋を払せ〻れ梯る協こなる

天和三年　癸亥　五月室

正月元日大雨沈り○正月車長持を禁せ〻る　火災の防ぎ防の
○二月六日市谷火○二月十六日牛込火　防とある也
○武蔵小路実篤公下向　孫生成日記
を立ありしと
あさハ〻ゝ寒の折柄ゝ孫とも家も殺ゝ〻ゝ〻ゝ
○本所筋廣小路成る○三月廿九日弱迄所町八百屋久兵衛の娘
お七火刑に処る　今年十六歳といふを顔美世人の知る所なり十二歳の春松竹梅の
二字を出さる模様をもしまの浴殿不揭〻るゝ公不ありこの
お七火刑に処る　お七火刑に処る
あり〻世奇特故の宝再建〻る所なり　外必雲湯孫江戸谷中感応寺
うけ〻る生霊鎮〻山法華宗寺〻云郭八百屋娘お七十七の年命〻〻〻〻
夜表三月と出家〻又同出家お七火刑に天和二庚三月とあり世〻八俱あり
○夏江戸大旱久○六月六日云義平内率　雲〻一素居士〻〻〻〻〻〻
墓あり耳底記不書〻〻を猶〻〻　条の平内あり弱迄海彩〻る不
人の家〻〻て法勇の人あり〻〻あり　○雲光院本堂〻る法孫〻る弱勧〻る〻〻
の災後東新田の辺〻〻源川〻移〻る浴町の如不あり〻新行〻弱迄

うつる○十二月五日沼尻焼（合羽ヲ掛ル方角未詳）○作兵衛源様行（武蔵国ノ住人）（俗称鳥九）
寛延の比俗説云西浜安善の
比の編て文会年に行せる中之

延享間記事

安宅丸の御船を解せられし時安宅丸河岸まで引出し船蔵を波
大船を乗せ一川の東岸の地へ移させる
○大屋形船を作る東宅丸（濱家様大船路人）非田市丸（非田一の大船）熊一丸（文政九年焼一丸）
山市丸（日本橋の船と後者八百屋所一丸内之）外て大船あり此橋船の名家の一年江戸
船を拾迷年中あり（車舟合考云天和の比小山田弥市市といふ者の徒人の令張を作り奪ひ元禄八人を殺しけるに是八町ごと源を夜八川岸ヲ
繋さる屋形船を乗ひ云り一説に紙を使ひ云ふ町ごと元禄中迄先あり一ヶ所を作りて大屋形船
町奴義を止めふ町ごと元禄中迄先あり一ヶ所を作りて大屋形船
○俠客源兵衛十方寺遠流に流る十八年を経て宗門改を許さる
○千川上水出来るハ延宝天和の比なるへし板橋の南の方深瀬の南

のうしろ和泉の池の方より本所ひび柳原通り柳原ふり出て
流を千川上水と以ふ享保七年中より止あり又同一比年所の内綾瀬
川の水流を業平橋筋ふ引て又本所中ふ掛て上水を白堀上水
といふ是も享保中作るなり上水の川筋今も業平橋の東北の方
の橋際より菊屋敷世話村の方へ通りて小川一流あり是別なり白
堀上水の筋あり（川上車舟合考ふあり）
○非田永安町の地八作兵衛家皆川町八対馬家屋敷なりしを
天和中作兵衛家八下谷へ引けて牛込町屋となり永安町と云対馬
家八松平下総屋敷安善なりしを後宝永の比町屋となり皆川
町といふ松下町代地の所も元禄比まて八太田摂州侯非尾家屋
中記なりしなり○去の比土佐節浄瑠璃流行せ

○天和中浅草寺経蔵へ商人の荷物を入置しが失火して
焼亡し後再興ありしと云
○葉の一本に日本橋一丁目塩瀬が隣瀬戸物町にの丸八助抱より
あつまりける池のちさのねん安蘇藤左衛門が場の菖蒲縁芝の
陳ニ度唐贈坂田町の蓮屋が温飩云ことあり此時代の始なり尚
へし○此頃まありし順比丘尼の内神田めつき町（竪町）よりある永
玄お姫おま川老僧といふ名より出てありしとぞ吉兵衛が羽二
重の投頭巾をうみ出してこれを編子紫賢と名つけ来たり又
宝永の頃まてありし線摘といひしも土妓にてありし
○此時代に喜多川雪山が書行る
一年木村氏とは雪山は肥後国隈本の産にして
代々三立と号し加藤家の侍医なり加藤家の開
国を細川家に封せる時は三立も又細川家に仕へ其父三立は学文を
ぶし兼て人を会せる雪山も幼より学文を好み兼て人となり拙法を口授して能筆

の名あり若年隠元師の会に参禅し三方斎の友としこれを出世の事とは不同
とありしき猶立曰いろはにも書ても筆力積神雪山に及ぶ者はいかにといふに家々
猶立あり彼は三立ありて二立と号しはと清警しくるとあり雪山江戸に来り黄檗の僧
と同伴して来り山谷浅草に来る後室町深世に偶居は此に延宝年中なる
へし門人五六十輩あり広沢の二老あり文を世時人侍にもいきくその侍を写さり
二老とは雪山広沢の二老あり広沢もとは二人と云しくは二老累侍にあり
○池乃端錦袋円行る　勧学院の了翁僧都は羽州の産なり幼くして仏家に入り一代
蔵経を寡く集せんことを發願し雑行を修しけるが寛文
二年にありし去年より焼せし一指痛みしまふもろる所を夢中に肥前黄檗山の悟山如
定禅師より薬法を授り野に来り念を通ずる錦の袋の内より見出して授くまさに
とて錦袋円と号は後東叡山の麓に表七間裏行廿二間の市店をひらき此薬を
ひさぎ其利を以て蔵経の料に充てし薬師勧めるの事を全に開き海内に広く随て江戸に弟子迎る五十人余
ありても似せ薬を調合して売るもの数人といふことを知りて其家の意を聴てまこ全
を養ひ市中を能く細くして売らしむ或人これを翁に告て云其者を訪はんは如下
の薬は行く広るへし若広らねば大きなるべし彼人と善其志示しさりなりと云実
其の薬之は流人を助けばあんが為なり若此薬を売る妻子の役りとも広らねば
年之の一つありと或人又曰若彼か薬人に出売あるは其料は如下に帰すへし翁曰
日月は東地に落は師て天下に但たと同じ数因にして互に天罰しても与まし○とて
貞享元年甲子　二月廿一日改元
正月晦日後忌令法定○元三大師七百年忌

○知足院を湯島へ移し、ゆゑ高地八神田の東にあり

○弘法大師八百五十年忌○正月廿日古筆二代了珠卒 年七十才

○東福寺七仏薬師下谷に移る 麻布 薬師坂 へ移る

○九月廿二日官医曲直瀬玄朔卒 麻布祥雲寺に葬す ○九月大風家屋を吹倒す ○十二月圓覚師 保井算哲 天文の職なり 貞享 貞享暦を天文安く改暦の

多年の功により貞享暦七巻貞享暦法通書五巻を編述せり ○甲子江戸暦刊行 松本寅坂武蔵坂行の始とす

○慕世改暦頒行 但宣明暦を改めしなり

貞享二年 乙丑

二月廿二日流星東南より西北に光芒百里を照し暫く有て空に翳あり霞の如し ○墨江田魚燈 観音開帳 浅井了意この時代

墨江田の山線中文もきよらんじたせど ○五月伊勢子福寺東師如来開帳 このとき十二神将

の像あるべし 本造なり ○日暮里流行神社造営 ○六月浅草寺智東院別当を百数さまを東叡山御兼帯と成る ○九月江戸日枝山真安修年七十才 ○十一月霊山寺再檀林と成る 此時法華宗本山へ入る 元禄本山へ入る

○同 二年 丙寅 二月

正月一日古筆了世卒 ○関二月利根川西を武蔵と定む

東を下総と定めし昔師孫二ケ国に分る 東は常陸川より西の地は昔師孫西昔西孫下総に属せり上代武蔵国なり中古下総に属せり今年昔のごとく武蔵国に属せしめ給へり ○正月版図令出る 元禄元年六月前追加 又同年九月追加同七年四月出る ○九月品川御殿成る ○九月小石川白山権現祭礼始

毎年幸に通りを渡す ○九月大小神輿組と号して西堂を罪科に処せらる 神輿組と云は堂を清め祭を主とす安永陽峯に仁に組とす人付参まれり

同 三年 丁卯

三月十八日より流行し親世音開帳○同寺二王門外金剛親世音
勢至像建立　頭目と称する邑樂郡破林寺の僧侶
庵房住職丁成井治三郎発願のよし建立
○江戸無宿子七冊棒行　他者坂田氏
○七月廿二日より廿六日迄本所回向院にて家斉卿参詣奥行
○女用訓蒙図彙板　此時代の風俗
○三田実相寺貞女塚念仏会愛
乃ふ子迄なり
正伝女貞享元年丁卯十二月十二日とあり　是迄は本郷町小伝馬町
と言葉を立て父母不孝あり後に夫婦
ある村田伊右衛門と云者不孝にて貞操あり而幸ひして父母再婚の
と近くの頻あまたひとりの食を減じ一日を経て遂に飢死
ある　紀伊国屋文左衛門の妻の産まれし松の操の名なり
その貞操云ふ可しあるべし　三田丁実相寺二ケ寺あり
のなり　此寺は芝町寂照山実相寺
あり

此年間記事

貞享元禄の江戸繁昌記　卷之三　終

○貞享中流行あり六々橋流る事あり　撰る事あり
義志料ふ中古田沖丘陽宿澤の名あり　紀伊国屋文左衛門
以上　同国云沖古江戸の三大橋六西丘の名所六々の橋を
元禄の江戸老人の物語りあり
○弱迎光源寺大観音造立　江戸の町人丸屋吉兵衛寄進之　此時弥田の
町屋敷を求て造る　今ふ番屋の料ケ所　○千解通り　江戸町通り　行屋敷三湯
といふ　○江戸村隨見南新橋三丁目　移る　隠町八丁角通り　灵巌寺十二条
川岸まで　居宅庵草土蔵造り　明暦元後町　公儀あり　江戸土を
江戸村隨見　此時の田を　表門は溝町　表門は新川
元禄中　江戸繁昌記　卷之三　十二

○大の時代の江戸図浅草花川戸を松川戸とあり

○源吉日記云　婦女の著く用る笄（こうがい）八貞享年号御厨子所より起
後花園天皇ゆえ二人不祥にて無後絶不十数年ホして宇内乱弘
まりしとあり

元禄元年　戊辰　九月晦日改元

当年の初の地震元の如く武士町屋をうつさる姫路侯の地と聞
此時より年の西に当りて年庚辰年西に当る
しかの板の中不載ゆえ諸説を吉川氏のおとりて載せり　○浅草霊山寺（りょうせんじ）年前に移る
○九月祈田明神祭礼祈禱神輿練物始まる　御城内に入る
○十月二日儒師西山健甫卒　公儀兼板本養生院に葬
○十月十八日連歌師宝村昌程卒　○十一月神田橋御門邸に知足院
を移さるを御新敬となり乙亥年より改て飛鳥山護持院元禄
寺と号す　此時御城内より移り地蔵堂庵侍の日八年
御家人別に付義侍御禁令せらる

同二年　己巳　正月空

正月十二日儒師今井弘齋卒　号魯斎年七十
○正月十六日此日老人星現ず　老人星は寿考の徴あり治平
○五月十六日雨天二十二間堂を焼て御産家の居福井藩奥州矢島五
千二百六十を対て江戸の天下つと減る
○十月婚姻（こんいん）の時の名あひせ御制禁あり
○十月廿五日夜異星巽の方に出る○十二月山村雪吟翁英男
湖書に　呂公学方の婦人あり同七年法印に叙す
○江戸図説惣図板行　西丘乃川流宣後之編図一枚本一冊　○再訂江戸惣廛分板七冊　松月堂日角編

同三年　庚午

二月鬼門御守を左衛門町より汐留まて大工町より元材木町まて

廣徹（ひろこうぢ）と云る長崎町の廣徹を廢　長崎丁の西廣小路の南飛脚町と橋丁の乃之を西南大工町とある　火災の時の
海藻地海苔不産定を建しめらるる　ものなりしそ
○正月十五日正法院の葉房不空菴上人等日念佛會（ねんぶつえ）（まんさん）法數を修
辭集一十念を文多書の名号を乞ふ事繁し
○五月節（ごがつせつ）中藏寺（今天王寺）丈六佛建立形を東洋
○十月淺草寺（せんそうじ）別當佛法院（ぶつほういん）滅○警山（けいさん）文集滅　百廿卷
○十二月十七日金彫工横谷宗与（よこやそうよ）終○東海道分間延絵（ぶんかんえんえ）棒（ぼう）引
書を乃下機　菱川師宣（ひしかわもろのぶ）この年の板を
昌平坂と改る
○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟（たいせいでん）　今年この正（しょう）月
元孫正年　辛未　八月生
正月湯島丹大聖殿（たいせいでん）御普請成る　上野（うえの）の山地（やまぢ）の地形（ちけい）は林家の持ある
弥（いよ）を後（のち）を七十二賢（けんじゅう）先儒の像八面工（めんこう）狩野（かのう）洞雲（どううん）を画（かく）二月下旬迄成あ
同十一日祝奠（しゅくてん）あり此（この）時浅草町八代洲（やしま）堂（どう）の地度（ちど）ぐりしを今の正（しょう）代地（だいち）を賜（たまわ）て移（うつ）る　二月なり
おけ橋を古名一口橋　昌平橋と改る

須大成殿新落　芝山

登々昌平坂峩々士山東斯度斯經始倏忽成廟宮椒功
依勝地莊觀聳清穹畫棟麗輪奐鱗甍真玲瓏四配玉床
下雍容珠箔中三才抵太極六經定折衷禮樂孚雅飾文
教克磨礱山知仁有渠川聆道罔窮時否欲浮海栖々帰
魯門豊祀誠如在吉蠲捧芳樽神明永降監國祚齊乾坤
春入舞雩祭化雨澤黎元
○正月疫流行　○同九日俳人一柳折不卜卒　本所法恩寺に葬
○同十日俳人福田蚊丘卒　六十三才　○正月碧文谷法花寺宗門威勢
市谷自性院法花宗悪田派をあらくあ天台宗となる七月日蓮宗

怒田派の僧俗互に流く〳〵流さる○今川橋より小川橋にて橋割る
○六月十八日紀州根来寺山覚獲上人来年五百五十年忌奥義
大師と諡号をあり○七月宮医半井卜養罪あり年号くこの冠
流く流さる○八月湯島霊雲寺建立あり開山浄蓮
○十一月十九日茶人清水勧閑卒号濱紙菴牛爺
○慈濤房空無上人勧化して造る所の金泥立像の六地蔵尊の冠
服ありて江戸六所に分る川ち院号義源記号年
都業事況ありあり
○俳優名尽の内徐蒲不飛行たる　五元集　辰の刻ばかり
すきやの徐今まのの徐蒲　生角
○骨董集に文禄六年戊申大洪水子を引てり亥大雑晩年ばかりまたく光
遠あり元禄に年寅せ〳〵まこ〳〵あるを濱井が言ふ所なる所の仮
ばかり代り言しいふ人二人あり濱井が言ふ所信人今き人のり言八俗あり〳〵も此若遠の
去あり〳〵とあんこふの出はまのりまあ様濱ばさまと大ことあるをんを八少を
俗の言あるべし析手義分事況あるもあり〳〵あるこそあるあけを
東下のいとあり〳〵まて同ふより〳〵あるこそあるあけを

元禄五年　壬申

正月元日来申の時日蝕七分半○浅草観音堂造営
○大塚護国寺法堂仏殿造立○六月五日より伊勢光明寺造立
如来図向院あり寺田法光寺支坊に是三人の像
○八月法華宗大久保氏忠宣父母と俱に鎌倉にあそび扇谷
長光寺の境内に立寺ありける那上小の藤をとりて移り
牛込長命寺に載せり〳〵に沿革に文脱ふ脱ふまあり
の分ふふりても脱漏あり
○九月濱茶川流防町より聖天町まで敷地禁制の立札を
建〳〵る

同六年　癸酉

事飛脚設ける法然上人自作像江戸にあて寄進ありし
○二月僧源鶴弥陀孫兼率 名は福称令率 約延竜光寺末葬 ○夏中るの物を云く
世上小疫病行る事を告るとしの妖云つ般の時とありてこれ
を除く其法の書物を梓行せしかば世人妖云を言ふ〳〵せし若
しもを刷せしとし〳〵疫元〳〵
○五月蔵道町を小川町小石川薄紙町を袋坂町と改る
○六月廿八日鄙源氏の角三圍社迄ふるたの句を吟ぜし 奇談考ふ巻一巻乃
記を引てあり〳〵天下異賊あり田舎の人〳〵世の常社の句を
作り須臾にして再隆るといひ伝る事尚社にあり
○七月彩大橋流 去る橋舞台を大橋といふ故文ふ対して彩大橋といふ元孫
五年の冬深川大橋ありしが流れ〳〵附 橋の上芭蕉同じく橋流りし附
おりしも思いでひて流橋の歌 月 ○八月廿九日夜南の文殊堂炎上
葬送の切あて一孫子塚も 本の墓も彩墨うみ 寺角

元孫七年 甲戌 五月改

○二月八日将軍洞雲益信率 上野護国院ふ葬 ○二月廿九日深川東漸寺焼失
寺領再建あり ○六月湯島霊雲寺実八幡真言宗の本寺と称る
○六月廿六日杉山検校伝一寂 八十余才 孫勤寺葬 ○七月浅草大護院ふ焼
子八幡宮を勧請せしめらる 一説ふ元孫五年とも云寺は黄八文殊院と云
寺号を文殊院別当寺の事あり 此大護院と改む寛安年十月十六日新山宮
○八月二日小塚改尹率 七十才 号蓬雲 称檜十郎左衛門次男なり 第四ふ名あり 深川浄名寺葬也
○深川宜雲寺剣 世ふ云一塵 寺あり ○高田宗八幡宮社地ふ水家明神
を勧請す ○江戸名所活板行 七巻
○増上寺世二世貞誉上人大僧正ふ任じ足ら代く大僧正なり
○十月七日奥澤村浄土寺墓所頂上人寂 七十七才

○十月十二日芭蕉翁浪花ニ寂ス○十一月十五日平人山名玄山卒 名義豊 市谷谷丁菩提院ニ葬ス ○同十六日吉川惟足翁卒 七十九才

○十一月狩谷東大門ニ高札を建てる

元禄八年　乙亥

二月八日未刻大風江谷佐賀町より出火芝札の辻海辺まで焼亡

○三月儒師谷一友卒 名松号己千洲 長谷寺ニ葬る ○柳原押貴稲荷御宮焼

内藤木城院○五月宮医余綿吉庵卒 八十才 弱冠ニ葬る

○五月英雄院元師ニ国師号を追贈しぬ

○七月護国寺正覚住ス○八月朔日本所浄土入佛供養あり 五百羅漢像を彫刻ス是松雲院自ら勧化して刻まる西方の弥陀 脇侍観音大勢至菩薩 ○九月明のん誠禄師寂 水戸徳川家ニ出家ス葬を徳川師匠墓のうちあり

○金銀を吹直さる九月より通用ス○十月中野ニ大小屋を建てる○十月十六日東叡山二世公海僧正遷化 寿八十九 ○十二月報寺屋橋辺より出火新橋まで焼亡

同九年　丙子

新橋始て掛る 百年以前新橋のうしろ迄海ニ成ル元禄二年の頃大洪水と云 ア、河ハ新橋を流ス 大ナルハ此月 涼庵 ○正月十二日宮僧人貝友元財ニ市場ニ卒 名弟 号竹洞

○二月牧野長門守家法橋を鋳せ〻めしてこれ浅草ニ納る

○五月廿二日上野中堂ニ安置ス師如来ニ志賀郡円山寺より近ク出ス同廿七日十二神日光円光像ニ羽黒山形立ル寺より

○六月十九日大地震○十一月十六日東叡山中陵雲院ニ慈海僧正

迂化（訓点法華経法花経）を世に広く上梓せ
○十二月十二日水府侯儒臣平野重葉卒（公年表京ちの平野も碑文に平山紀伊守有）

元禄十年　丁丑　二月至

五元集拾遺　大小の吟

大一座を（四六）あるくたくく（八九）霰（十一）師走（十二）この寒ふ　玄角

○正月十五日北村湖（しゅん）玄卒（年五十余才）

五元集　湖玄をいたみて

ほくよむ絵冊もあり玄角　愛

○正月法華上人ふ圓光大師の諡号を奏ふ○飛騨村々て洞幾を禁ずる
○下谷五条天神今の所ふ建（昔八上州ふ立ル所ノ人ふ坂瀬川ノ時者ノ家ヲ負ル動ふ落ル者ありしとかう今年移されも開門昌信の宅地之）○酒運上法定○五月八日より新大橋ふ於て定式渡し

勅諚能興行あり（忌日之支助を勤む）○六月訓点金通用始る
○同月磨同郡十一人ふ宮ゝ○七月より復古する観音堂護持院
大日堂法華経○九月飛戸天満宮神号の法式白川吉田ふ復し
左寧府の例ふ准ずべ旨　勅許を蒙る
○十月十七日大坂上の町より出火長堀小日向牛込田安迄焼
ず焼亡
（阪田町世話番の地坂牛込須賀谷の濠中の法華寺ありしを町屋と成れ共ハ
あて型之年建立仕しかう延宝の比仏寺ハ坂の下ゟ阪田町と云ふてあり）

同十一年　戊寅

正月十二日再人桃園柳栄卒（名守光号遊雷亭　池上本門寺ふ葬）
○三月川村隨見（ずいけん）　石巻さま（侯）稚孫をあたる天和二壬戌年（新樹子ふ八月享甲子年ふ）
大坂川く法華宗を命せらるを功成江戸ふ帰りて年古文と成る

安治川も出来成る○五月小石川御殿造営

○六月九日医師板垣宗憺卒（歳六十余にて卒す）○七月備前国井伯庵卒（名養号東皐　号梅東稼堂と号す）○七月隅川海辺一万坪を築立てる（海鼠と号す）

○七月廿三日両国橋自今御殿まで掛け渡しある

○八月彩日永代橋今日より渡し始る

○八月東叡山根本中堂文殊楼二王門并山王社（今の西照宮）御遷立

廿八日神堂入佛あり（九月三日仏生会立日より法人参詣を四ヶ寺の僧侶一時に福蓮華一山門前を立る地もあり）（一時に福蓮華一山門前を立る地もあり）（町奉行ひ〻紀度小路こせ〻まし〻もこの時なり平田町八軒町宮野町車坂町のうち家ふ柳町黒門町まで元拂せ〻る平田と為の溜へ代地をなる）

南郭文集　東叡山瑠璃殿

一旦経営結構新、入門何処避紅塵、玉楼金殿高多少、不庇貧民七尺身

○九月六日浅草殿の勅額到来あり（此勅額は持仏院基殿に書かれし勅額なり）（川茶屋中半の竪横の丈尺かしも遠ひあるく書ふ柳町の横ふ四角ふ横ふ所板をもて白紙をもて文字をを施し）

御こそ解くこのひうるを清書して

殿質ふ御入佛あるて後彫刻し漆塗を施

金奥を頂て紫宸殿の前ふ傾て来ふ実ふ下ゆ〻こと

○同日巳刻ふ新橋南鴻町より出火南風烈〻く大名ふ諸通町筋

神田下谷上野浅草坂溝筋山谷千住掃部宿ふ到る（三里）此時溝筋

廿三日ふ焼あて元禄十巳年ふ到り深川ふ延焼辛庚河岸繰り

河岸八ふの道橋十五ふ成る○三浦屋新吉板垣ふ有〻ふ東叡

山中堂ふ移浅草田原町へ移る○十二月十日本石町弐丁目より

出火日本橋霊巌寺八丁堀鉄炮洲佃島まで焼る日本橋焼落て

人多く死す○十二月西丁目ふ潮汐漏せる（巳十六才医板町二丁目彩乃ふ知一時あり）

○十二月廿二日備前屋市兵衛卒（名貞幹号ふ元千束村ふ葬る）

元弘十二年　己卯　九月改

去國横山町横矢の法華堂去年災後今年二月西門跡の東南に移す

一不動堂　矢の出羽の海の海に町座敷小路とあり大々に某沢町と成と云

出羽年紀と記り別矢の出羽あり〇矢の出羽の地に寛永の号に町とあり乗願の号に

巳下後も有しとあり久勝志に八ッの出羽とあり〇地宝の号に矢の出羽と記せり

武羽志科に云柳橋に柳原の末に安り世に称柳橋と云る八俳に是に実説あり

の南茶所塔ふる塔を元柳橋とあり〇是に実説あり

橋とあり式に八ッ〇橋この所に河に有しに元弘とあり今に矢の廊へ

西に廣小路あり昔に廣小路の南の方に大溝あり是昔の矢の座の外堀の溝あり

元弘の古墨あり〇紀に記り式に板矢の座を引まてその跡に鴨氏の邸宅と成る

故に今ふるりて鴨氏の支流僅に残る〇鴨氏も宅を移して五座の

別座とあまりに鴨氏の支流僅に残る〇地に住居する人〇

俊明の名き所に〇の今所のみに住居の人〇

〇二月法天和尚生寛大巌寺に住職〇巳月巳日本橋辺より出火

筋遠所まて焼亡〇巳月巳日没の小南千年忌法事

〇八月十九日大風〇九月六日川村隨見率　巳若天誅寺　平藤也

同　十三年　庚辰

二月十日信濃より出火浅草辺出羽屋敷焼亡

〇後國ちゑて城州淀清源寺に釋迦如来開帳　巳月廿七日下向あり中

略　あるへし日数八十日のうちあり式年なる巳年の開帳なり　巳月八まそれのうまひのの下向　を南

〇永代浦築地六万坪減〇八月十七日より葛西飯塚村久兵衛世話

出現より二年三年同ゆえ開帳〇深川佐賀町今川町の辺に出来

村に同屋六万坪に地をのこりて引移る今の本所あり

〇水戸辰之助山村長左衛門変化の不思議をなす

同　十四年　辛巳

正月元日乙卯辰刻日蝕〇或記云永代橋の辺に大河内何某殿

古歌あり〻今年三月元日玄宴〻何の所とも知る人なき女の首級あり人〻驚き不審尋ぬるに人の形を得て手足門の祥瑞あり
とて是をまつり鎮宅地祇を崇む　世人謂て云ふ　後ふかりの遊女る
尾の社あり〻と云ふ〻〻今も社代橋の側ふ小祠あり
○二月十九日古第五代の祇率代　立十七才　○二月天波宮八百年
法忌乗年あり団子付餅戸社ふ於て詩并連俳興行あり
又元集　七月南の白丹
松梅やあるもの年も八百歳　○三月京真如堂左桑左子沼戸ふて
宴席　手手花　来詳　○三月十日淺井家左良家事あり一日之世人の
知る所也〻交丹贅せば　○三月麻布御殿初て出来
○三十三間堂深川ふ移建　立元集　新〻三十三ヶ所
若葉もきのふの葉又も木綿妻　三角
○深川海濱寺祥寺宴剣弁文天を安置　年基和尚院
隆光僧正

○仏壁ふ〻川て本所法恩寺ふ那人小屋を建る
○十二月和人冬長谷川安清番員屋伝流の三人〻商ひ
御免あり

元禄十五年　壬午　八月宝

二月十一日江谷滝町〻り出火青山麻布白金浦品川ふ〻る
其の時麻布御殿品川御殿妙国寺立寺清二王門焼亡　品川御殿
御再建
○二月十五日日本橋の上ふ橋ふ於て
○まとり葛西飯塚村名主親世言江戸并近在〻り多治羅
集まる事騒〻村長の家〻り愛恵の茶〻て出ふ和効あり
〻て法人〻を求む　又江戸西　宴席せり出世地名ふ那も村内の社〻
○天満宮八百年御忌　西行上人五百年忌宗祖法師二百年忌

○正月三田久保稲荷霊験赤坂の檀那屋敷を加護眼疾を憂るものの法つゝて験あり（れいあらの名いとゝ）

○六月廿七日湯島霊雲寺山淳巌和尚覚寂比丘寂（世寿六十正といふ）

近世の頑徒と称す

○八月廿一日平人北村正立率（東照宮の三男なり幼年瑞林寺中玄忠院に葬る）

○寺領村百姓領方農つゝ痕山地の叢中より石動尊の像を得さり因新法を設ける不納む（野田武貞負郭居住の中年繁らず一せ年尊あるゝ）其後の法あり一世繁る石動尊といふ

○貞徳翁五十年忌（来月十八日慶四の人を年解も花のむり卯　主角）

○十二月十日浅野家の義士四十七人本高を建（幸い人口に鱠炙まるとりて）

元禄十六年　癸未

二月正日浅野家正十七士自尼泉寺に葬る

新撰子甚帰宅廿　寺号の対むーらゝ切腹　石墓除経ふ　拾てのむ墓屋あるべし死骸の山　言ともふ角地あり或者秘書義士の事を記せるものあり引用の書名のゝ

次不巻

赤城盛衰　赤城紀伝　外石記　遠かみ石記　少海記
彰擁大石記　摧花集　赤穂遺臣伝記　武家時鑑記　易水連状源
義人録（宝永元年）　遠士筆記（寛政十年）　山科の笑書　遠義碑文（遠義碑の三字は大石内蔵助の筆なり）　偉明作
柿石編　瑞光院記　義士考
蓬窓記　義士文通
春蔭赤穂四十六士論　赤穂義臣伝（享保巳亥厚斎武鉅）
赤穂義臣伝（享保巳亥厚斎武鉅）　義士絶録

○二月九日儒師松田明軍率（義公義雲寺に葬る不葬）

○小柄原日慶寺再興○三月麻布赤坂辺焼亡

○正月廿一日石川彼中寺の原梶川与惣兵衛十二才あて深川世三郎雪不矢数を射る（雪ちう翌日午刻迄半矢数三万二千三百本延矢一万十一本を射る）

差殿様りぬひーゝ八文百服を射ちうしゝ吊所在不

百万の恐孫をぬつりとゝん村山三五郎湯ゝ云人の門人ゝ

○五月廿五日西久保天徳寺門前左衛門妻三人の男子を生む（三助伴助）

恵那と号す三番
度のこと也

○十一月廿二日霄より電強く表八時地ゆる事雷の如し大地震
戸障子ゆる家ゆゑ紙の大浪ゆゑ動くゆゑ地二三寸より五寸ゆる
て又六尺程割れ砂をふき上るひゆゑを吸ひ〜ゆる所もあり
又地震ゆる家荒潰れ穴荒揺あげ死人数〜〜迫さけぶ声衝ゆ
異品〜又所〜毀ゆる家ゆゑより失火あり八時ゆる津波ありて房総人
ゆる多く死ス内川一ゆゑ荒引ゆゑ荒あり山時ゆる報安地震あり
あゆゑ小田原ゆゑ荒して騒〜く死亡の者九二ゆゑ二百人小田原ゆゑ荒川近
辺ゆゑ人房州十万人江戸二万七ゆゑ人内廿九日火災の附あゆゑ焼るものゆゑ七百三十九人ゆゑ
あり〜ゆゑのゆゑ荒ゆゑ附深川世三間堂焼ゆる廿日ゆゑ
ゆゑ方ゆゑ及て由り止むゆゑ後十二月まで震ゆゑ多くあり

ゆゑ荒ゆゑ焼ゆる所ゆゑ多ゆゑ引中院通ゆゑ
○十二月廿九日歟大風雨ゆゑ退ゆゑ火ゆゑ出て焼ゆゑ
東ゆゑ田ゆゑ荒ゆる町小伝町協同小田町本所横川向両院の辺深川
永代橋まで焼ゆゑ焼ゆる所ゆゑ焼ゆる所ゆゑ世ゆゑ地震火事
ゆゑ○回向院一云観音像山門ゆゑ安置〜ゆゑ十一月霊震の
告ありて機上ゆゑ所ゆゑ廿二日夜地震の附山門ゆゑ倒れつぶして
廿九日の大火ゆゑ焼ゆゑ焼ゆゑ所ゆゑ引退て つゆゑ〜ゆゑ
焼人伝ゆゑ山ゆゑ〜て来消群集せ〜ゆゑ一云記ゆゑ人ゆゑ二云乃理〜て来会教ゆゑ
○伝火事ゆゑ能人小枝ゆゑ家焼ゆゑ「焼ゆゑ焼見舞」牧童
梅ゆゑ雷やまゆゑ一番ゆゑ焼見舞ゆゑ
世事間記事

元禄の頃杉山検校信都江島弁才天の霊験を得て鍼術の妙を得本所一ツ目に地をたまひこゝに弁才天の社を営む（今本所一ツ目にて其福の神といふ）
○雑司か谷鬼子母神参詣群集する事始る（江戸町人伊勢屋武兵衛といふもの社堂を再建す）
○白金覚林寺宝剣（加藤清正朝鮮王の連枝を連来りしか是ハ日延上人と号）
○湯島天百棵山鳳閣寺宝剣（当山派触頭にこの時ハ湯島天神の下にあり後今の霊雲寺の東へ移りしを後青山へ移る）
○江戸鹿子江戸惣鹿子に載る此時代の名家名物大略を左に挙る

△儒者 八代洲河岸 林弘文院学士 筋違橋内 人見友元 同 玄亀 林源三郎 坂井伯元 同伯隆 本所町 木下順庵 浅草 津田伯栄 △神道 京橋 吉川惟足 浅草 自謙 貞円 八代洲河岸 伊庭 孝貞 辻春達 △手跡 長三左衛門 為久 保佐々木万次郎 中村立長 △古筆 同 利 本八丁堀町 畠山牛庵 谷中 了仲 了伯 △茶湯 本石町 常軒 京橋 清水宗川 同 本橋 井上一之 市ヶ谷田町 茂山 勾当 △連歌師 里村昌程 同 昌陸 同 昌純 同 玄祥 同 紹春 石町 彦 △俳諧師 本所 芭蕉 本町一丁目 河岸 幽山 石町 四丁目 才丸 山下 丁工 呻 南小田原町 其角子 鉄砲丁 園 調和 伊勢丁 不卜 幸入 日町 言角 小石川 素

町山岡 石町二丁目 嵐雪 南伝馬町 嘉言 伊勢町 一晶 本町三丁目 立志 又 新材木町 沾徳 堀江町 林中子
△絵師 幸町 狩野洞雲益信 新橋 竹屋町 狩野養朴常信 おが町 狩野永叙之信 同丁 狩野右京附信 鍛冶橋 狩野探信守政 同 狩野探雪守霊 竹川町 狩野左近昌信 狩野友仙内友信 同 外記秀信 木挽町二丁目 狩野休円清信 同所 狩野内記是信 浜町 狩野春雪信之 同所 狩野一学知信 八丁町 狩野求馬頼信 木挽町 狩野内匠英信
△浮世絵師 橘町 菱川吉兵衛 同 吉左衛門 古山新九郎 石川伊左衛門 杉村治兵衛 石川流宣 亀井清信 菱川作之丞
△浄瑠璃 堺町 土佐掾 葺屋町 和泉太夫 志左衛門町 江戸半太夫 説経 堺町 天満八太夫 吴嶽 吾妻新四郎 堺町 江戸孫四郎 土佐太夫 呉服町 虎屋永宗 人形町 江戸語斎 本大坂町 肥前太夫 新材木町 江戸次郎右衛門 新材木町 対馬太郎 左衛門 土佐説経太夫 同 情町 村山金太夫 南鍋町 大坂七郎太夫
△上るり本屋 大伝馬町三丁目 山本九右衛門 同所 △座三右衛門 長谷川町 松会三四郎 通油町 鱗形屋孫兵衛 同 正本山形屋市郎右衛門 △芝居 狩野 日本橋南三丁目 杉村休宗 南八丁堀二丁目 又兵衛 九右衛門 ぬしや 幽玄斎 △志かうし 長谷川町 麻脇 式左衛門 横山町 三丁目 休芸 中橋 さかや小左衛門 四郎兵衛 △けさ物 芸 住吉 むしや 天神前 水右衛門
△大仏餅 芝 田町 つるや △まんぢうや 芽場町 塩瀬 山城守 △日本橋南一丁目 同 葺屋町 えびすや 羽形布袋屋 同所 えびすや △米まんぢう 金竜山ふもと 同所 つるや △ふいご焼 浅草 文殊院前 えびすや △桜餅 芝田町 三丁目 あめや 長左衛門 △おこし 花町 藤屋 △麦麩 浅草 すわ町 柳屋 △練羊羹 湯島天神前 △饅まんぢう 大伝馬町 二丁目
△鶏のやき 麹町十一丁目 助兵衛 △ところてん 芝 橋本屋 △見世屋 堺町 市川屋 おが丁 きりや

△同横丁塔之町若木や本町野橋お雲丁△京良米撰町狩羅屋同茶橋屋約形ひ約屋△多切をはきり弦米町丹波屋与兵△芳阪同茶ちやや△食けんとん舎於山不川沢沼や同西丁舎屋同茶△あさがわせんべいわ八丁堀茂屋清左衛門その外ちゝ〳〵まゝ〻数寄者を八器す

○茶の湯ハ武川の浮世絵ハ武者ハ武川長喜も武陸代の浮世絵師ハ元禄宝永の比ハ武者

○此時代俳諧冠り付始り世ハ武者る○筆曲岩崎検校岩橋勾当

安敦川流行ハ武者る花都といふ流行小唄三味線の上手

○一説ハ此の朝素松者の矢一名ちり系ハ武者といふ小唄流行投節小うた

こゝ方ちり者ハ武○幇間髭の垂体といひしも此時代

○一節切の笛中古ちり廃ハ武者此時代ハ武者炭絵美ひさり

○世事談ハ揚弓ハみやこ一中此道を浮ちり一表二百本矢〳〵ハ

的中ちりといふ元禄の比ハ武者ハ五寸未頑といふ女人のりの未熟

上手ハ百八拾匹ハの矢員ハ武者中絞改切の看板ハ武者の

上手といひ比年ハ百八拾匹ハ常の事ハして百九拾匹或ハ七八ハ

多ハ武者〳〵の稽ハ世人〳〵ハ上手ハ武者

一中といひ貞享中ハ武者ハ彼宅與ハ揚弓破宅與ハ揚弓射程蓬矢拭の法解（退考を著せり

上手ハ武者ハ俗の数ハ武者一中のハ武者ハ武者ハ武者ハ武者ハ武者ハ武者

絞改切十三ヶ所を再新熱廉子大全書

或ハ今ハこの然〳〵廃ハ武者

○葛西ハ十三所ハ武者観世ハ此世所元禄中浅清ハ武者門葛

紀ハ武者〳〵流行ハ武者○澤〳〵熱慣子（案慣子の九ちハ紀のおりを付る）ハ武者

○小笠原の子孫ハ武者流行○山本菊の流ハ武者菊ハ者を密る事

元禄の末ハ武者止宝永ハ武者ハ武者ハ武者ハ武者ハ武者

いハ武者○吉原の遊女八朔ハ白き帽を元ハ武者る事元禄中ハ武者町

ハ武者丁月巴屋源左衛門ハ武者抱ハ武者る揚といひ武者ハ武者ハ武者ハ武者

居けるゝ別業の客来ありし時居るる自むくの侍ゝして揚屋へ
しける客の艶ありしとゝ見を去れば八朔ゝ一般ゝ白むく
を着る事ゝなりしゆ花衢大金ゝ入り
見物のともゝ武家の例ゝなりしとゝ　号本黄の振袖ゝ本来浅丹浅黄
八朝ゝ白き衣裳を着しゝるゝ尚て考　紀文大尽之俳号千山云
○本八町堀三丁目伝紀伊守屋文右衛門　材木商ゝて世ゝ聞ふ霊巌寺伝
寺ゝ良寛義右衛門　材木商ゝ世ゝ聞ふ　世ゝ人元禄中伝ゝ大ゝ限ゝ
人のゝゝ花衢新劇ゝ遊び楽くの場ゝを求ゝ巨万の家を費
しける事ゝ諸人の初る所也ゝ贅せり
○江戸真砂六十帖　元禄中の頃ゝ人物を元とする絵町ゝ伝ゝ今ゝ
横丁町ゝ引移るゝ徳り○元家業ゝ諸ゝ武江叢話ゝ
伝田小右衛門小山判官を殺しゝる伝ゝ云伝ゝ妻恋稲荷の橋

社ゝ小山判官ゝ霊祠あり又素志の坂下湯井小平次義技芸技
ゝ義経の妻恋塚の西ゝ小山判官ゝ塚ゝ小ゝ計り伝義経ゝ元禄
の頃ゝまでゝ有りしゝ崩れて今ゝなくなり伝ゝと云
○元禄中の豪家神田佐久間町ゝ伝せし尾実庵流祖ゝ
唐仏の釈迦の立像を得て弁財弘福寺ゝ寄付し年号ゝ伝ゝ
故ゝ伝ゝ谷玉院ゝ安置ゝ尾実代々の墓ゝ谷玉院ゝ在
彼支婦の像もありとて○元禄中江戸諸所建設切ゝ
○元禄六年温清彩の江戸絵図ゝ本町二丁目の左右ゝ所
の湯地町ゝ伝る町左右ゝ所湯地あり其彩橋ゝ仮橋と記り表
橋ハ矣の古義の通りゝ一つ目橋の陸ゝ接しゝあり　水戸橋同定書ゝ
乃橋ハ吉祥寺橋とあり今の昌平橋ゝ表は橋しあり　此橋同定書ゝ

村雲町と称遠山の内（山門の際まで連花町の四地の例）なりて青梅と記せり（村松町八幡保の墓ふも）
（高二の木あり）黄の花あん橋を今の如くあるあん橋とあり赤あん橋の名八今
のまゝ小田町壱丁目の先の橋を赤ろ記せり今の山下戸つを和
ひぐやしとあり（月十三年の墓あり鴻巣橋とあり又武山門を黄八張山門といふ）上野清水観音堂八今の御弁
山と唱へる所の山下あり大塚護国寺の門前塔田園あり
○三圍稲荷社内小一丈の狐あり例の墓所小焼ゐて墓ふるとき
ほとゝきす狐うちをあゝもに（ほ稲荷や狐よひかに焼うりて　毛角）

寛永元年　甲申　三月晦日改元

二月廿七日地震巳月まで度〳〵震ふ
○女郎橋と新大橋のうち小道を分ゝる（去年の大火すぶ来ゆへ人多く死せるゆへなり）
○三月年号改元あり〳〵詳吟味
寛永の絵ゆうまを墓の事　冬野里公

○五月二日本因流を始元祖本因親伝率（小日向本法寺　斗養氏）
○六月十五日より七月朔日二百余を辺大雨大川筋を水大水八月
廿日より山水あて下総猫ら股ふ多押〳〵崩〳〵田畑を家ふ墓ふ流
して死亡人数を知ゝ氏本所深川流墓山谷下谷辺屋宇を浸さ氏
○六月廿三日小堀政光率（幸政長二男孫十左衛門墓ふ墓
墓をよゝせゝを〳〵年六十六之）
○七月廿五日より九月朔日まて護国寺於て土作出五大山文殊
養蔵開帳あり○八月御人ふ異ふ志率（巳十八才二世の立志ふ）
○九月神田明神社御遷宮あり
○十一月聖堂御再建成廿五日迁宮
○今年ふ墓橋西法ふ始て嘉世候の見世を
ゐ〳〵名為とあり〳〵世事後年いろり

同　二年　乙酉　巳月至

三月より回向院にて摂州呉服の薬師如来開帳

○同月より護国寺にて摂州大沢山久安寺千手観世音一千年目開帳○同月より永代寺にて江州竹生嶋弁才天并同所本観世音并総州成田山不動開帳○五月深川に洪あり

○六月十五日北村季吟翁卒　八十二才池の端正慶寺に葬る碑の銘あり辞世にいはく「花も見つ郭公をもまちいでつ此世後の世思ふ事なき

○七月より回向院にて洛東霊山萬阿弥陀開帳

○同月本所法恩寺にて京本圀寺釈迦如来開帳

○同月永代寺にて江州日撫明神開帳

○今年伊勢宗廟諸国より参詣多し　俗におかげ参りといふ和漢合運に此時の事ありし文を略して云

閏四月上旬の頃洛中洛外童男童女七八才より十四五才まで父母に告ず伊勢詣せんと抜参りをいたすもの多し難波寧楽ハ洛外といふもさらなり家内一所にかけ出て法人抱せる如く妻子従僕ハ主人にいはず衣をも着ずに参詣を保掛衛門八代選莫大なあして路を立へき地もなし凡参詣の男女一日に二三万多き時ハ弐三万人といへり此時

洛中有徳の族施行を致し或は茶或は銭或は布木綿の小袋襦袢菅笠等を贈る其東三条の橋詰に於て摂津の国の男女にあたふるの類あり江戸ハ堀家の施思の利を知ざる又伊勢路の下りハ名貴き諸人の本覚乃宿を得る又秋七八月に至てハ諸国より参詣勝て伊勢路ハ京師より別て群集をなすが如しハ或報十里の所を二三日に往還せし者あり或ハ死せしもの是多あり嬉しき人ハつらなく帰りし諸あり又ハ宿にハ種の古麻薬隊しりしとなハ伊勢にて除し大豆を賞して新座し不忽大麻と変せしおよびしる此時のさまを要し記して宝永千歳記と題せる草紙あり又本居大人の玉勝間にもいへり去同じ云日蓮宗本形寺門徒ハ中々さみしていふさくいひもおし侍らん是ハ御主派の輩は迷ハさるにあらてハおくまてさ己が家にまよひて家跡よりうくも云なし侍るさまと深ましき行り神異に信を発しまどひ侍るものあハまし侍るべき者も云へこの頃の人おか侍代あれや古倚残もその年どこの家よしおきもらひろある

○七月廿六日官医武田杏仙卒　長寿院と号す品川東海寺中少林院に葬

○十一月廿日夜亥刻より数寄屋橋呉服橋御堀端の方南小六町東西三町計り流武寄方八ヶ所焼失翌五日巳上刻火鎮る

○十二月青山善光寺谷中より移る　今も谷中に善光寺坂といふあり是旧地なり

寶永三年　丙戌

正月二日伯耆守様（ほうきのかみさま）御年賀（ごねんが）　名帝湖号宮滋様小右帝
饒の様田夏之介義也

○正月十日秋子別邪田須田町より出火して筋違見附土手町
屋敷田町く本町石町通り小伝馬町池町大門通り長谷川町和
泉町安藤町辺より大坂町より材木町迄こうう場ふ焼る翌十五日
夜別鎮る○正月十八日四向院にて法事せし案五十年忌吊法事あり○二月廿日夜亥刻南鍛冶町
より出火南北町東西二町焼亡せり
○正月十日梨子の年武勝年　戸田氏忠恭光号年之義故濱本命終ちり
葬式辞世　見の秋まるのこそおられるそう紀
命のまえを　○正月十七日伯耆栗山潤年年　名愿　称源助
ちまの向ひて　弱冠詩光ちの年年

○六月元字今改習あり是を宝字殺という

○七月ちり根津権現社内の瓦葺所再興十二月成就ス舊地八分
いの国子坂の所なり○七月廿二日大雲殺ちの所ふ流る
○八月将軍松林悔伝図田垣の部金ち八幡宮へ捐る
○九月十五日亥ち別大地震○十一月九日医師藤生方菴年　名義
の父之三田　長松ちの年義　個様
○　屋敷秋百姓ち捐くる　ちの月江戸砂子
拾遺ふ引くり
○十一月十六日己刻巳谷作町ちり出火巳丁半焼焼
○同月廿日夜子別和泉町辰ちり出火大坂町伝右町長五郎町堺
町蓑屋町出火芝居茶屋町長谷川町ち武家方ち幅二町長十
五町計り焼亡

同巳年　丁亥

正月巻亮川陽地義堂祐天僧正再建ありる称院と云日金伝命右衛門

絶絶の日あり○正月十五日中津中村川町より出火牛所一の橋并本所のより中の仁業寺天狗の社を元小橋不動堂不動尊

○二月晦日御人馬率 年七才 号宝晋斎 二代板上行ち不幸也

○三月八日大火あり〜中正保頃不記 来詳○伊勢朝熊山虚空蔵流井四向院光寿院○八月廿二日本郷山勧学院乃翁俗称家

○七月二日下谷雲福寺住持傍誉法事寂 五位の日はまの田来しり 甲良流宮学不分肖し人之

○八月朔日小石川立慶橋辺より出火幡随院町三軒町往来焼也

○九月廿日麹谷安左衛門率 俳諧の句不実相さい如月俗廷の園をてゝ沢んを 墨〜ゝ〜れ 月八窓 一中日頼 ○九月廿七日儒師松浦文翠率 六十四才公黙称茂立帝 日蓮宗上南京也不義 ちゝくとも浮世のやゝの果もかし

○十月十二日御人馬部嵐雪寂率 九十四大約江常検ち不幸也 辞世の句 一茶荻畑ひとたちる風のと

○十一月十六日運寺住星村昌陸率 六十九才

○徳田銀札出停止あり

○十一月廿日より富士山の根ゝ須走より出焼る天晴く雷声地震

鳴〜く実東白灰降りて雪の如く地を埋む為南頻りに呼びり

あり白晝晴夜のごとく不成灯焼挑灯をともせ廿二日強風もゝく

廿四日ゆり天晴を祝日を浮て法人安楽を又廿四日廿六日

再ひ天雲り砂降り雷声のごとき雷鳴地震あり昼より雲灰降

廿八日平常のごとし此時ゆゑ富士山を宝永山といふ世人此時喧嘩

を慎む 此時折焼宗不日元さう此黄冠士山焼る例の延暦十九年二月廿四日より 四月十八日と今年のごく焼貞観元年五月十四日焼ること云く

○十一月廿八日清人馬率 三田小山 大学ち幸

宝永五年 戊子 正月室

正月元日大雨○室正月二月武蔵相模二所共ゝ砂降

○二月地上ふ白毛を生ず○三月秋元摂津守岩田彦助といふ人武蔵入る彩場の菓村場菓井の旧蹟久しく處を失ひ人の歎きなる様を亜侍ふ聞を建る○同月朝日菓人山田宗編率 八十五才 久周学 京都頼ち地中若竜ちふ菓ずの子 二分山田久他宗座せ勿樹菓宗後ことを云 ○同月郷人芳賀一晶率 一出ふ宗永 三年ことも云

○五月十又蔵ちしめて通用始る 表ふ宗永通宗表の稀ふ永久世用とあり 経一す二分重一分又宗ふ田ふ度の 臣ふて林宗流の門人極に好門ちふ ○深川の渡門 世ふ地義 ちがい ちくりふ 正元金銅の地蔵ちる六躰を造立 ○今年ちり始て江戸ふ前ふ安すを用ふ用ちる 今年 九月成 山谷本孫寺 宗永七宗 八月成 同谷義宗ちる 正徳二辰年 九月成 菓鴨ちの正ちる 正徳四年 九月成 深川霊巌ちる 享保二ち 同月成 同前永代ちる 享保五子 七月成 ○みとり麻疹流行

○十月廿日日算湖の師関彩助菊和率 号 自性関流迫 年迫法橋ちふ率

○絶ち家祈本地佛観世音寄帳

○十一月十五日深川八幡宮造営遷宮○十二月二日将軍隨川考伝率 ニ十七才 ○十二月廿二日後篇十代廉率 八十二才

○十二月谷中感応ちる 今の天王ちる の隠ちある宮ち乃居宗ふ尚歯会あり 世時後辺幸居百廿七才ふて上ち疫あり 病ふよるぬ人ちる派の 傍二人宗衣信人素浪徳ふて若ち疫ち 長ち藤長寿秋家正光門弟日月堂 此時ことを云ふ宗のるふ撰ふり是上 席の者の古実ふるち幸居八幸正撰ふ比ち安渡河之天正十年壬午ふ出る仕信の比ちを の勲功ふり仕を稀して後役私して居ちふ ○ 九十九才の時後朝一宗永八年正率 同ふ元幸居老人の後ふ人八十ち比ち菓のせり 九十九才の時後朝一宗永八年正率 ちとせ出くふ得ち平上方ふ八十才ふて出ることを八十の人と書て菓ありことりつり

宗永六年 己丑

正月十又蔵通用止○去年十月廿日の後ふ隅ち江戸正月十一日 疫ふ死くふ流る 物騒ち ○三月流疫流行運上御免

○同月二日ちり七月二日まて深川八幡宮遷宮

○六月宝字銀通用ちまる

○七月より九月まで回向院にて法華宗浄苑院法花会初る寛帳

○九月名賀朝湖俳諧をもちさる後英一蝶と号す　深川長寿町　下谷也

○十二月廿日能人小澤將八卒　本銀町坊正なり　後年琴を琴を琴を琴を琴を琴を

○浜辺幸斎対話記成　杉本茂藤　編写本

宝永七年　庚寅　八月閏

二月上野清水稲荷の社殿草葺形に移る

○三月二ツ宝銀信濃改　○元禄大地震の頃を集せしを法令る

札場定る○湯島円満寺寛剣開山本食義写上人卒　享保三戌六月七日

迄化九十五才なり　○基回向院にて稲荷世尊如来寛帳

○二月十五日角田川本母寺にて桜の丸七百世二年忌大会佛回向

拝ふ小紙紀不滅の貞元元年より七百世又年忌あてまつり　○二月より五月まで永代橋永代橋

完成変服の絵馬寛帳朝日持る茂実の親世尊又昆摩の不動尊

開帳○二月より五月まで深川八幡行寺にて荒包の阿弥陀ならびに

千波仲の軍陣の図仏の多親世尊二月月不動尊結る兵才

天寛帳○四月乾金剛二ツ宝銀通用始る郡代判通用止

○七月十一日飛騨国の剣立の松雲禅師寂　六十二才

○七月より宝八月まで市谷八幡宮境内に於浅草法輪寺虚

空蔵寛帳○九月廿一日芝口五門流能楽師にて法人世阿弥

日法名二丁目より二丁目まで廿三日二丁目二丁目と改る

○十月十日夜刻池上本門寺焼亡　一本不十二百

○十一月琉球人来聘　正後英里主子　琉球国王子

○武隅等不分年まで分ちて

大火ありしとぞ云せり　○十一月青山梅窓院の鶴瀧を落ぼん
とせしに時住持法蓮社岱誉上人の愛犬終に女犬となり畜生
ふして佛果を得たりしと俗にいへり那くの色を
加へて瀧を持かゝ解説を設るの因縁もあるべしと云ふ
つゝ爰覚て後例ふつの面の鏡あり上人亨吳の号ひをなしこの
瀧ふかへるを鑄改むとのつり
○十二月十九日未申刻神田小柳町つぎ真田家出中屋敷より
出火出風烈しく半町五町八丁堀霊巌海辺迄長二十
五町幅二町ばかり七八町ふれる翌日辰刻鎮る
○第七面版七面大明神勅諸　菊と以る女武天王の命令の後
爰の告あり　てなるべしとぞ

世年間記事

宝永中霊夢ふかりて南部侯の用ふまつる石像の閻魔王江戸
金地院境内ふ移す
○宝永中疫病大に流行し江戸近辺の百姓共ひとりすの麦藁の泥を
洗ひ初江戸の市ふ売りるるに求ものしりの瘧疾の患をのがれ
とり返魂丸の方ばかりの方ばかりあり世俗代辺辺の童子数を孔して
湯けるとて○塵塚怪談曽我の事ふ云ふ
あり薄雲ばかり特況り来長崎ふくやうに稽古なり享保
世年乙卯小石川出土に裁ゝ元文ふかりて弘まるとぞ記り
　　考をあらせり　○鼻紙袋この時世ばかり始る
○宝永中寺社奉行水野出羽守忠之公実法公寺社下向の時宝寺を
　　郡内と花ふ初る人ふ見せたる宝寺の雪のちりを

○寛永元年板橋近辺多摩の沼尻島小菅塚合の原ふうりゝ
有馬多摩の南郷矢の口蒲原町原と称蒲原宿の高輪町家飛
軒を並べ 魚戸牡蠣海天満宮ふうり来の方小間りてあり

武江年表巻之三畢